



「社会システム学Ⅱ—社会システムと環境」

グリーンアジア国際リーダー教育センター助教
渡邊 智明

2013年度の「社会システム学Ⅱ」は、2013年5月29日から6月26日の約1ヶ月の間、計12回の構成で講義を行いました。

環境問題は、しばしば科学的技術的な視点が強調されます。環境リスクを適切に評価し、環境負荷を低減する上で、科学は必要不可欠なものです。一方で、環境問題の解決には、被害者の声を反映させる必要があります。また、環境政策は、市民、政治家、官僚、利益団体そして国家などの異なる立場の人々の利害や価値観は反映するものでもあります。従って、環境問題を考えていく上では、このような市民の利害や価値観に大きな影響を与える政治システムや経済システムへ目を向けることも重要です。

本講義では、このような観点から、まず第1に、日本および韓国、中国、東南アジア諸国を具体的な対象として、それぞれの政治、経済システムの差異を確認しながら、各国の環境問題への対応を検討し、議論しました。第2に、②気候変動、有害廃棄物の越境移動などの国際レベルの問題を取り上げて、国際政治のあり方が環境問題に対する取り組みにどのような影響を与えているのか、そして先進国や発展途上国の経済格差を生じさせている国際経済システムが、国際的な環境政策にどのように作用しているのかを検討していきました。

なぜ日本では、水俣病に代表されるように1960年代には極めて深刻だった公害問題が1970年代に入って改善の方向へと進むことになったのか。同じような環境法を制定しているにもかかわらず、なぜある国は環境汚染の低減に成功し、別の国はうまくいかないのか。また、オゾン層破壊に対する国際制度は成功しているのに、気候変動問題では、国際社会の合意は難しいのか。これらの問いに対する答えは、国々で異なる中央-地方政府（集権か分権か）の関係や、経済発展の程度であるかもしれません。

わたしたちが、社会のどの部分に焦点を当てているかという意識は、環境問題を理解し、その因果関係を説明する上で重要なことです。GAコース生および他コースから参加の学生諸君が、講義および議論を通じて、こうした「社会の見方」を考えるきっかけを得ることができたとすれば講義を担当したものと幸いします。

